カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

教皇さまの意向

・世界　「争い」のことばよりも「愛と対話」のことばが広く行き渡るように
・日本　すべての死者、特に犯罪の犠牲者や自死者に永遠の安息が与えられるように

2019年10月 宣教のための特別月間
第1回準備委員会 開催される

9月30日（日）、「宣教のための特別月間」を長崎教区としてどのように過ごすかを話し合うため、最初の準備委員会が大司教館で開催された。委員は、7地区の評議会議長、教区女性部代表、青年代表、女子修道会代表、教区本部事務局長、信仰養成部長、福音化推進部長、典礼委員長、召命委員長、広報委員長の16人。

テレビ会議により地区間で意見を交換（大司教館会議室）

初めに、この特別月間の目的を確認するため『カトリック教報』1065号（2018年10月）1面の本月間に関する記事を読むとともに、教区シノドス後の教区の目標である「神のいつくしみを共に生き、伝える」ための取り組みと優先課題を確認し、その後、委員全員に発言を求め、意見交換をした。主な意見は次の通り。

○手紙を出すなど、教会から離れている信徒への組織的な働きかけ。
○教皇来日、さらに長崎訪問に向けた招致運動。
○来年度の立ち上げを準備している「ミゼリコルディア長崎」の活動支援。
○いのちの大切さをあかしする啓発活動と研修。
○世界遺産登録の機運を活用し、教会を紹介する活動の推進。
○各教会の歴史や先達を学び合う交流の促進。
○さまざまな相談や分かち合いができる、交流の場の創出。
○小共同体づくりの推進。
○困難に直面している宣教地との連帯。
○宣教する教会に向けた意識改革。そのための講座や研修会の開催。
○みつあみの会主催「祈りの集い」の普及。

これらの中には教区シノドス公式提言を受けてすでに取り組んでいるものもあるが、これらも含めた意見を11月25日（日）開催の教区評議会役員会に提出し、審議されることになっている。

「宣教のための特別月間」を有意義に過ごすには、何よりも一人ひとりが参加することが重要だ。長崎教区にはすでに諸活動部門の委員会や信心会、活動団体があり、また小教区にも同様の組織があるので、各々が宣教、すなわち「神のいつくしみを共に生き、伝える」ことを意識して、それらの活動や取り組みに参加することが期待されている。

聖フランシスコ病院 長崎教区へ移管

長崎大司教　髙見 三明

聖フランシスコ病院の前身は、1925年に開校した長崎公教神学校、1931年から聖フランシスコ神学校、1943年に結核療養所として浦上第一病院に転用され、被爆しました。戦後、聖フランシスコ診療所が開かれましたが、国際的に医療活動を専門としていた「聖フランシスコ病院修道女会」のアメリカ管区から派遣されたシスターたちによって、1949年10月、聖フランシスコ病院が開設され、1970年には新築されました。

病院では、毎朝聖堂でミサが捧げられ、ミサ後の方々に霊的慰めを与え、身体的な癒やしと同時に霊的な癒やしを与えるという福音宣教の使命を果たしてきました。

司祭はご聖体を持って病床の信者を回ります。望む人は司祭の祝福を受けることもできます。聖フランシスコ病院は約70年もの間、患者やその家族が、問題は同修道女会会員の高齢化です。20年前までは会員数約15名でしたが、現在は3名が派遣されているのみです。

カトリック病院として福音宣教に大きな役割を果たしてきたこの病院が存続の危機を迎えました。病院自体の運営は機能し、自立できていますが、1年かけて真剣に検討してきました。

聖フランシスコ病院は「宗教法人聖フランシスコ病院会」の病院であるため、宗教法人にしか譲渡できないという理由で長崎教区への移管を打診され、来年2019年10月以降、病院経営は長崎大司教区が包括する聖フランシスコ病院会が行います。この長崎の地に、カトリック病院がこれからも存続していくことの意義は計り知れないほど大きいと思います。神のご計画の中で、多くの協力者そして利用者に恵まれ、福音宣教のよりよい場となりますよう、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

喜びに沸く教会 新司教叙階

さいたま教区 マリオ 山野内倫昭（みちあき） 司教

9月24日（月）午前11時から、明の星学園ジュビリーホールで司教叙階式が行われ、さいたま教区に山野内倫昭新司教（62歳）が誕生した。

同教区は2013年7月以来、5年間司教座空位となっていたが、このたび新司教を迎え、式に参列した司教団、司祭団、また、1600人以上の信徒らが喜びに沸いた。

大分で生まれた山野内司教は南米アルゼンチンで育ち、同国でサレジオ修道会に入会。1984年司祭叙階後、97年から日本で働いていた。モットーは、「UNUM CORPUS IN CHRISTO」（キリストのうちにあって一つのからだ、一つの心となりますように）。

鹿児島教区 フランシスコ・ザビエル 中野裕明 司教

10月8日（月）午後1時から、鹿児島県文化センターの宝山ホールを会場に中野裕明新司教（67歳）の司教叙階式が行われ、多くの参列者が新司教の誕生を喜び、祝った。

中野司教は鹿児島生まれ。1978年司祭叙階後、鹿児島教区広報担当や鴨池・玉里・聖心・ザビエル・志布志教会などで司牧活動に従事。1984年にはローマ・ウルバノ大学に留学し、教義学教授資格を取得。2011年から日本カトリック神学院の役職に就き、今年2月から院長を務めていた。

モットーは「まず、神の国とその義を求めよ」（マタイ6・33）。〝Quaerite autem primum regnum Dei et justitiam eius.〟

島原・天草殉教祭
今年は島原教会で記念ミサ

10月7日（日）、島原小教区主催の「島原・天草殉教祭――福者記念ミサ」が島原教会で行われた（写真）。例年この殉教祭は原城本丸跡で行われてきたが、今年は台風の影響で前日の設営ができず、島原教会に場所を移して行われた。

当日は台風一過の晴天に恵まれ、聖堂にはあふれんばかりの参加者と共に、長崎北地区司祭団らの共同司式で記念ミサがささげられた。参加者は、前田崇史師（愛野教会）の優しく諭す説教に励まされ、殉教者に倣って日々、信仰を守り、深める決意を新たにした。

参加者の中には協賛する天草の諸教会をはじめ県内外から多くの巡礼者が見受けられ、その一人は「毎年、原城跡でのミサに参加し、その都度感動を覚えていたが、殉教者にささげられたこの教会でのミサも一体感が感じられて素晴らしかった。来年も参加したい」と語っていた。

一方、現地での開催について主催者は「原城跡が今年世界遺産に登録され、会場設営や駐車場の問題など、来年の開催を危ぶむ声が上がっている」と語っていた。

死生観と葬儀 学ぶ
公開典礼講座

10月8日（月）、上智大学講師であり『聖書と典礼』の編集長でもある石井祥裕（よしひろ）氏を招いて、「キリスト教の死生観と葬儀」をテーマに公開典礼講座がカトリックセンターで行われ、200人余が聴講した。主催は教区典礼委員会（下山盛朗委員長）。

午前中は、ギリシア・ローマ世界の死生観や葬儀に対する考え方が、聖書の時代や中世を経て現代にどのように影響を与え変化してきたか、午後からは特に現代のカトリック教会が行う葬儀の意味や、2016年に教皇庁から出された葬儀に関する指針の日本における適応について話を聴いた。その中で、最近よく聞かれる散骨や樹木葬は認められないこと、分骨や墓仕舞い、ペットの葬儀の問題などの話があった。最後の質疑応答で、「小教区の葬儀でいつも暗い歌ばかりが歌われる」という質問者に対しては、聖歌担当の平本義和神父から「復活の歌を取り入れてください」との助言もあった。

現在は、聖木曜日・聖なる過越の三日間・主の降誕・神の母聖マリア・および待降節・四旬節・復活節の主日には葬儀ミサは行うことができないが、み言葉の祭儀と告別式は行うことができるようになっている。

ほしかげ

近頃、幼少からの恩人や恩師方に逝かれることが続く。また会えると先延ばししていたら訃報が飛び込む。人に後悔はつきものだが、やはり心残りな気持ちにさせられる。「Memento mori（死を想え）」「生者必滅」とわかったつもりで、いつのまにか忘れている事実である▲時宜を得て想うのは「人は生きてきたように死んでいく」のかも。遺族と話しても思うが、しっかりと生きた人はしっかりと、感謝で生きた人は感謝のうちに、人をいたわりつつ生きた人も然り。生き死にはひとつの道みたいな。「得体の知れない死に向かってビクビクするのではなく、これまで自分が生きてきたように、死ぬ時も死ぬだけだ」と緩和ケア（ホスピス）患者の荒井英子さんは晩年に語る▲想えば亡き祖母も生きてきたように死んだ、そんな最期だったか。暇あればコンタツを手にぶつぶつ唱えていた姿がよみがえる。祈っては必ずメダイに接吻するもんだから聖母のお顔はのっぺらぼう。でも残された私には気品を湛えた祖母の作品でお守りとして今生きている▲マリアのまなざしはどこか伏し目がち。勝手ながら「瞑目の聖母」と呼ぶ。考えるというより、神のみ旨に心を寄せているようなまなざし。「Oratio Suscitat（祈りは立ち上がらせる）」故人に瞑目しつつ、自身の死にも心を向けることでより豊かな生きざまに導かれたい。神の母聖マリア、今も死を迎える時も我らのために祈り給え。（昭）

Synod 2018　Youth, faith and vocational discernment　「若者」をテーマにしたシノドスに向けて

教会はいつも新しくなる⑩

まだまだ道半ば

木鉢教会　工藤秀晃

青少年が置かれている現状

今から5年前、「青少年委員会の提言」としてまとめた文章に、当時、委員長であった私は次のようなことを記しました。

――――――――――

長崎教区の次の時代を担っていく青年・高校生たちに対して、これまで以上により一層の関心が向けられなければなりません。なぜなら、多感な時期にある青少年は、少年期・青年期を過ごしていく中で心身の変化を伴い、様々な事を体験し、経験を積み重ねながら人として、キリスト信者として人生の土台作りを行っていくわけですが、その過程で種々の問題に直面し、戸惑いをおぼえながらも、以前に比べてうまく答えを見いだせずにいるからです。

一概に言う事はできませんが、社会生活においては、過度の競争原理の中で、学業や労働はもちろんのこと、様々な分野で成果至上・結果至上主義に走り、そこに至るまでの過程や取り組みは軽視される傾向にあります。また、先行き不安な現代社会にあって、進学や就職においても「勝ち組・負け組」といった言葉で評価が下され、あたかもそれだけが人間の価値のすべてであるかのように見られる傾向があり、心根の優しさとか人間的な豊かさといったものは二の次にされつつあります。さらに、景気低迷であるがゆえに仕事を欲してもなかなか思ったように仕事に就けず、たとえ就けたとしても非正規社員としての雇用であることも少なくはなく、生活基盤を築くことそのものが揺らいでいます。また、「個々人の意見や考えを尊重する」あまり、家庭や地域における交わりや一致、絆や連帯といったものが薄れ、「自分さえ・自分たちさえ良ければ」という自己中心的な考え方が蔓延してきています。こういった状況下にさらされ、これらのものから来るストレスや人間関係の希薄化によって、どことなくしらけムードが漂い、殺伐とした世の中になっているように感じられます。

信仰生活においては、出発点・根幹であるはずの家庭において、家族の生活形態の多様化により、一家が共に集って祈りを唱えることや一緒にミサに与ること、あるいは宗教的な事を話題とした会話がなされる機会が非常に減少しつつあります。世俗的な価値観が重要視され、信仰教育に対する両親の考え方の相違や軽視があり、さらに言うなら、大人たちそのものが信仰に対する自信や誇りを失い、キリスト者であることの喜びや豊かさや意味を感じることができず、青少年に限らずどの世代の子どもにも「何を伝えたらいいのか、何を伝えるべきなのか」が分からなくなってきています。

また、多感な時期にある青少年に対して、保護者でありながらどことなく敬遠し、表面的な部分での浅い関わりに留まってしまうケースもあり、信仰教育はもはや教会まかせの傾向が見受けられます。その教会においては、初聖体（年長組～小学校低学年）に始まり、堅信（小学6年生～中学3年生）に至るまでの期間は、大抵の場合とても丁寧に要理教育や信仰教育がなされていきますが、しかし、その受け手である小・中学生や保護者の方が、要理教育や信仰教育を他の習いごとやお稽古ごとと同じ、あるいはそれ以下のレベルでしか捉えていないため、その場限りの事柄になってしまっていることも往々にしてあります。もちろん、堅信後も継続的にアフターフォローがしっかりなされる小教区もあるでしょうが、多くの場合その期間を終えると、つまり青少年の時期になると、ある意味それぞれの自発性にゆだねられる傾向にあります。それは、肯定的な見方をすれば、「堅信を受けて一人前の信者として歩み始めたのだから、その自覚と責任を持ってこれまで以上に信仰生活に取り組むだろう、教会活動にいそしむだろう」との期待の表れですが、否定的な見方をすれば、「とりあえず堅信までは親や大人の責任において導いたから、後は自分で取捨選択をするように」と、急に放任されて自己責任が問われだすのです。また、青少年側にも、「何はともあれ堅信を受けたのだから、しばらくは教会から……」といった具合に、堅信を受けたことを信仰教育からの一種の卒業か何かのように考え、一時的であれ永続的であれ教会から離れたり距離を取ったりする傾向が見受けられます。それゆえ、所属する地区や小教区に高校生会や青年会、あるいは定期的な集まりなどといった青少年の受け皿がなければ、それまで培ってきた要理教育・信仰教育も途切れがちとなってしまい、次第に信仰生活と日常生活とが遊離してしまうことも少なくはありません。反対に、青少年が積極的に教会活動や典礼奉仕などを通してお互いに関わり交わろうとしても、あるいは教会施設の中に青少年固有の場を見いだそうとしても、精神的にも空間的にも気兼ねすることなく集まり、安心して居ることができるそういった「居場所がない」こともあげられます。

また、いまだ宣教国である日本において、カトリック信者同士による結婚は決して容易ではなく、大抵の場合は異宗間での結婚となることが多く、教会で挙式をするためには配偶者となる人にキリスト教を理解してもらい、その教えや価値観・考え方を受け入れてもらわなければなりません。しかも日本では、特に女性の場合は、嫁いだ先の宗教を守ることを求められることも多々あり、キリスト者としての自分の信仰を守ることや、ましてや相手を洗礼の恵みへと導くことが容易でなく、困難を伴うケースが多々あります。

こういったことから、本来は恵み以外の何ものでもないはずの洗礼が、あたかも「足かせ」であるかのように感じられ、捉えられ、キリスト者として生きることや信仰を守っていくことが自分の喜びや原動力ではなく、むしろ息苦しさや煩わしさ、無価値なものでしかないと思われているきらいがあります。しかし、だからと言って青少年たちが神様を求めていないわけではないのです。「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」（使徒8・31）との言葉のように、いま一度「恵み溢れる神様のみことば」を中心に据え、青少年に寄り添い、共に悩み苦しみながら答えを見いだしていく、そういった青少年司牧に教区全体が取り組んでいかなければなりません。

――――――――――

課題として

あれから5年。何か変わったかと言えば、それほど変わらない気がします。むしろ、実際に活動している青少年たちは、大人たちの過度の期待と教会における様々な役割を背負いつつ、新たなメンバーが増えて来ないことでさらに疲弊してしまっているようにさえ思えます。そんな心ある青少年たちを逃がすまいとあれこれと重荷を負わせるのではなく、教区・地区・小教区においてもう少し緩やかに育てていく必要があると思うのです。

また、各地区には青少年担当の司祭がいますが、青少年のみに特化しているわけではありませんから、それぞれ自分の受け持つ小教区や地区の他の役割を果たすことにも追われ、なかなか思うように深く青少年に寄り添うことができていない現実があります。それ故に、地区ごとに青少年司牧チーム（司祭・修道者・信徒）の結成が必要だと思います。

それから、教区報、教区ホームページやSNSなどによって青少年に向けて情報発信がなされていますが、隅々まで届いていません。どうしたら手にしてもらえるか？紙面・画面を問わず見てもらえるか？関心をもってもらえるか？　再検討するとともに、口コミなどを通じて定着化させていく必要も感じます。

いろいろと発想の転換は必要ですが、一長一短に解決する方法はないので、地道に声を掛けながら関わり続けていくしか方法はないと思うのです。

青少年の皆さんへ

最後に、青年・高校生の皆さんにお願いです。どうぞ大人たち・同世代の人たち・後に続く後輩たちと信頼関係を築いてください。諦めないでください。うまく行かないとき、ストップがかかるとき、そこにはまだ何らかの要素がどちらかに、あるいはお互いに足りていないのかもしれません。

私は信じています、この長崎教区に意味のある一生懸命さを否定する人はいないと。むしろ、本当に大切なことなら、いろんなことをなげうって応援してくれる心熱き人々がたくさんいると。ですから、どうぞ何度でも挑戦してみてください。傷つきたくはないでしょうが、訳知り顔になるにはまだまだ早すぎる気がしますよ。

小神学院で一泊体験

― 召命の集い ―

10月7日（日）から8日（月）にかけて、長崎カトリック神学院で召命の集いが行われた。昨年まで「体験入学」と呼ばれ11月初旬に行われていたが、時期を早めることや呼び方も再検討されて「小神学院召命の集い」として開催された。

台風25号の影響が心配されたが、県内外から20人の小中学生が参加し、神学生や司祭と一緒にレクリエーションや祈り、夕食を共にし、神学院での一日の生活を体験した。ミサの中で、松田聡史院長は「さまざまな機会を通して呼び掛けられる神様の声を、祈りながら心の耳を澄ませて聴いてほしい。もし司祭を目指したいという人がいたら、ぜひ来年の4月からここで一緒に生活しましょう」と呼び掛けた。

現高校3年生が卒業すると、在校生は11人となるため、高校生からの編入も含め、一人でも多くの新入生が入ってくることを神学生・養成スタッフ一同心待ちにしている。

「召命の集い」に参加した小中学生

〝素直に信仰を生きたい〟

長崎南地区合同堅信式

10月7日（日）午後2時から中町教会で長崎南地区の合同堅信式が行われ、21人（中学生18、大人3、うち1人は佐々教会）が堅信の秘跡を受けた（写真）。

ミサの説教の中で高見三明大司教は「信仰は好き嫌いの問題ではなく、本当に必要なものです。大切にし、祈るように」と諭した。感謝式の中では、受堅者代表の大山千笑（えみ）さん（中学3年、大山教会）が、「今日いただいた聖霊に信頼し、素直に信仰を生きていきたい」と決意を表明。保護者代表のドゥ・ティ・ホン・クックさん（大阪教区・仁豊野教会）は、「堅信式に参加し、安心して子どもを長崎に預けることができると確信した」と述べた。

式後は信徒会館で祝賀式が行われ、初めに南地区評議会議長の泊 光治さんが「信徒も高齢化しているので、若い受堅者たちに大いに期待している」と述べ、皆で喜びを分かち合った。

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村 勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

砕石・栗石・港湾用捨石一式生産販売
たつみ産業株式会社
西田商事株式会社
代表取締役 ミカエル 西田 剛
本社　〒857-1166 佐世保市木風町1468番地
TEL（0956）31－8268

長崎カトリックセンター前　長崎市上野町1-5　TEL 095-845-6175
医療法人 平田クリニック
院長 ヨゼフ 平田哲也
内科・循環器科・入院可
通所リハビリテーションあり

嬉しさと喜びにあふれて

嵯峨島教会献堂100周年

10月8日（月）澄み渡る秋の青空の下、貝津小教区の巡回、嵯峨島教会の献堂100周年の記念ミサ（写真）と祝賀会が行われた。

その昔、罪人が流された島であり、京都の公家が流され、故郷・嵯峨野を懐かしみ、その名が付けられたともいわれる嵯峨島。時は流れ、迫害の時代、罪人とされたキリシタンたちが、その信仰を守るために流れ着いた嵯峨島。信仰が自由になり、立派な教会堂を建て（1918年11月10日祝別）、幾度かの修繕を繰り返しながら守ってきた大切な教会堂である。

当日は大漁旗を掲げた5隻の漁船が、出身の神父様、歴代の神父様方、地区の神父様方、地区の各小教区の評議会議長をはじめ多くの信徒の方々120人余を出迎え、普段のミサ時は15人ほどの聖堂内は、あふれる喜びとお祝いの気持ちを分かち合う教会堂となった。

説教をされた山内 実神父様は30年ほど前のことを振り返りながら、自身が体験した当時の子どもたちとのふれあいの中での、「信者はよかっぞ！」という子どもたちの言葉を例に出された。「『信者はよかっぞ！』という信仰宣言の思いを一人ひとりが信仰の形で表していきながら、小さな共同体、小さな島の中で頑張って生きていきましょう」と励まし、呼び掛けられた。

島内の信者ではない方々から「よかったね！」「おめでとう」などと大変嬉しい言葉をいただいたり、また、貝津・三井楽各教会の評議会役員や女性部の方々から料理を含め陰でたくさん助けていただいたりしたことも忘れてはいけないことである。

10月、ロザリオの月。ロザリオの聖母に捧げられた嵯峨島教会の皆さんの上にマリア様と神様の豊かな恵みと導きを感じるとともに、嵯峨島全体が嬉しさと喜びにあふれた良き一日となった。

主任司祭　大瀬良直人

宣教者としての自覚を新たに

福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭

9月16日（日）第29回を迎えた「福者カミロ・コンスタンツォ殉教祭」が焼罪史跡公園で開催され、殉教者の徳をたたえるために200人余の信者らが集まった。現地でのミサ開催（写真）は3年ぶり。

髙見三明大司教と8人の平戸地区司祭団、また佐世保地区や聖パウロ修道会、カトリックセンターの司祭らも共にミサを司式し、祈りをささげた。説教の中で大司教は、多大な影響を与えた人物を引き合いに、「福者カミロ神父は日本に情熱を注いでくれた人でした。彼は宣教師追放令でいったん日本を離れマカオに移りましたが、日本への情熱が彼を動かし、捕らえられるに違いないと分かっているのに再度入国し、命をささげました。彼に情熱を吹き込んだのはイエスです。イエスの愛が、彼をそこまで駆り立てました。福者の日本にかけた情熱を学び、情熱を持って、受けた信仰を言葉に、態度に、表していきましょう」と参列者を励ました。

好天のミサはむしろ肌を焼くほどの暑さだったが、参列者は大司教の説教に熱心に耳を傾け、各自、宣教者としての自覚を新たにすることができた。

《続》教区シノドス これからどう進む ②

神のいつくしみを共に生き、伝える

カテキスタ養成の取り組みと課題

信仰養成部部長　中濱敬司

2015年教区シノドス閉会後、長崎教区は「カテキスタ養成」「小共同体づくり」「ミゼリコルディア長崎の発足」を活動方針に掲げ、取り組んでいる。各担当司祭からの現状報告を掲載する2回目。

「教区シノドス公式提言推進会議」によって最初の優先課題として、「カテキスタの養成」（公式提言6-8）が選ばれました。そこには、①教区（信仰養成部）がカテキスタの養成理念と方法を定めること、②各地でそれを適応しながら実施すること、③地区ごとに養成されたカテキスタで「教区カテキスタ会」を設立し、教区レベル、地区レベルでの研修会や相互援助を行うようにと記されています。

すでに、『カテキスタの養成理念と方法』（案）を作成し、今年の4月以降、各地区の司祭団の協力によって実施の段階に入りました。7地区から養成担当司祭が選出され、地区の諸事情を考慮しながら、現役カテキスタのための養成（生涯学習コース）と新たなカテキスタのための養成（基礎コース）が始まっています。また、今年から教区レベルでの現役カテキスタのための半日研修会（8月19日実施）も始まりました。

この地区・教区レベルの養成を円滑に推し進めるために、信仰養成部の中に信徒・シスター・司祭で構成された「カテキスタ養成研修チーム」を作り、月2回の会議を行っています。

取り組みを押し進めると、新たな課題が次々に出てきます。特に重要な二点だけを挙げます。

①小・中学生だけでなく全信徒や求道者のためのカテキスタを養成することへの理解。またその養成方法として『ともにこの道を』（2015年3月17日改訂初版サンパウロ発行、カトリック長崎大司教区小共同体推進室編）への理解と効果的利用法を探ること。

②そこには単なる信仰の伝達者としてのカテキスタのスキルを上げるだけでなく、長崎の教会共同体づくり（小共同体的精神）、つまり、みことばと秘跡に養われ、ミゼリコルディアの精神を生きる共同体づくりを理解するカテキスタの養成となること。

教区シノドスによるこの明確な目指すべき教会のビジョンが全信徒に共有され、またそのようなカテキスタ養成の実現に向けて、地道に担当者や協力者とできるところから始めたいと思います。

聖フランシスコ病院ホスピス病棟 開設20周年を迎える

記念講演会 開催

2018年8月、聖フランシスコ病院（古川正子代表役員、山崎和文病院長）のホスピス病棟は開設20周年を迎えました。

ホスピス病棟が開設される前は、悪性腫瘍の患者さまは一般病棟に入院し、多くの方が亡くなられていました。また、終末期がんの患者さまは疼痛緩和と心のケアが必要ですが、一般病棟では時間をかけてゆっくりとお話を聞くことが困難で、患者さまの心の痛みを軽くすることに頭を抱える日々でした。

1996年9月、欧州3カ国（英、仏、独）のホスピス施設の見学研修に参加する機会を得ました。訪れたいずれの施設も、明るく静かで広い空間をもち、患者さまは周囲に支えられ、また、宗教に癒やされて人生を送られている実情に接しました。その後、当院の終末期がん医療にはホスピスが必要だという機運が高まり、98年8月に長崎県では2番目のホスピス開設が実現しました。

そして、2018年10月6日（土）長崎ブリックホールにおいて開設20周年の記念講演会を開催いたしました（写真）。当日は台風の影響で足元が悪い状況でしたが、678人の方がご参加くださいました。特別講演の沼野尚美氏（宝塚市立病院緩和ケア病棟 チャプレン・カウンセラー）は「神様は負いきれない重荷は背負わせない」など聖書の言葉も引用しつつ、「今を生きるコツ」をユーモアを交えて話され、盛況のうちに感謝と共に終えることができました。

近々、当院のホスピス病棟は増床することを予定しています。今後も、お一人おひとりを尊重し、やすらぎのある入院生活を送っていただけるように努めてまいります。

聖フランシスコ病院

苦しみの中でも愛を証しする

聖トマス西と十五殉教者祭

9月23日（日）14時から聖トマス西と十五殉教者祭が中町教会で行われ、約400人が集まった（長崎教区主催、長崎南地区評議会運営）。

初めに同殉教者記念庭園で顕彰碑への献花式があり、聖堂内で十六聖人の玄義によるロザリオの祈りがささげられた。その後、髙見三明大司教の主司式、20人余の司祭団の共同司式のもと、子どもたちを中心とした典礼によってミサが行われた。

説教師を務めた山口雅稔師（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）は、殉教者たちの神への深い信頼と謙虚さ、謙遜さについて説くとともに、殉教者たちが神の偉大な愛を表したことについて触れた（写真）。最後に、私たちがへりくだって神の力を願い求めるよう、そして、「信仰生活の中に苦しみがあったとしても、その中に神様の愛が輝き出ますように祈り合っていきましょう」と結んだ。

ミサの終わりに髙見大司教は「殉教者たちの姿は他のキリシタンたちにとって信仰を奮い立たせる力となり、今も私たちを教会に呼び寄せ、信仰を証ししています」と語り、「もう一度、私たちがイエス・キリストに忠実な生き方をしているか見直し、なおもイエスに目を向け、聖母マリアと殉教者たちの支えを忘れず、信仰生活を過ごすように」と招いた。

アンセルモ 大曾昭神父

（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）

10月1日、諫早総合病院で逝去。91歳。

長崎県新上五島町青方生まれ。1955年1月6日司祭叙階。聖母の騎士修道院、赤羽（東京教区）、瀬戸・春日井（いずれも名古屋教区）、東長崎の各修道院に赴任。2016年から養護老人ホーム聖フランシスコ園に入所していた。

戦後まもなく入会。几帳面な性格で、しっかりとした身だしなみに努めた。教会の伝統的な精神を尊び、主に司牧や教育の現場で、誇りをもって職務を果たした。

葬儀・告別式は10月4日、本河内教会で同修道会日本管区の竹内昭彦管区長によって行われた。

ペトロ 黒崎勝郎さん

（前教区評議会議長）

10月3日逝去。69歳。

2013年度から教区評議会議長を務め、特に教区シノドスや日本の信徒発見150周年記念行事の開催など、長崎教区にとって大きな節目のときに、議長としてその側面から教区を支えた。16年に病気のため任期途中で議長職を交代し、療養に励んでいた。

教会関係者の一人は「とても真面目で誠実、読書好きで話題が豊富だった。自然と周りに人が集まるような魅力的なところがあり、誰からも愛され、信頼されていた」と故人をしのんだ。

葬儀・告別式は10月4日、多くの方が参列する中、黒崎教会で行われた。

苦しむ家庭に寄り添う

公開信仰養成講座

講師の古巣 馨師

教区生涯養成委員会は9月24日（月）午後1時から、2018年度公開信仰養成講座をカトリックセンターホールで開催した。今回は古巣 馨神父様を講師に迎え、「結婚と家庭生活」というテーマで話をしていただき、110人以上の司祭・修道者・信徒が受講した。

古巣神父様は長崎教会管区裁判所で、信徒の離婚・再婚問題について長年携わり、苦しむ男女に数多く向き合ってこられた。その経験を織り交ぜながら、現代の結婚観、それに対する教会の在り方などについて、興味深い話をしていただいた。また、講義後の質疑応答では葛嶋秀信神父様も加わり、質問された具体的な事例に対し、教会裁判所はどのように対応しているかについて答えてくださった。

性に対する考え方が変化し、それに伴って結婚の形が多様化する中で、多くの家庭が苦しい状況にある。それはキリスト者においても例外ではなく、教会から遠ざかってしまう原因の一つになっている。破綻してしまった家庭への無理解や誤解は、彼らの苦しみをさらに大きくしている。むしろ、教会はそのような人たちの救いにならなければならない。

結婚に対する正しい理解と、苦しむ家庭に寄り添うことの大切さを実感した有意義な講座となった。

生涯養成委員長　谷脇誠一郎

支え合って生きる

講演会と自死された方々のためのミサ

杉本脩子氏

9月29日（土）「命に寄り添い、ともに祈る」と題する講演会と、自死された方々のための追悼ミサがカトリックセンターで行われた。「ゆりの会」主催、教区人権委員会、教区評議会女性部協力。

講師を務めたNPO法人全国自死遺族総合支援センター代表の杉本脩子（なおこ）氏は「自死に限らず、喪に対して向き合うということは誰にでもある。大切なことは、自分が理解されていることを感じられること。今ある現実を表現できること」だと話した。

その後、髙見三明大司教主司式、人権委員会の尾髙修一神父、長崎中地区女性部指導司祭の平野哲也神父の共同司式により追悼ミサが行われた。大司教は説教の中で、「人と日々つながる環境を大切にする。それでも事故は起こってしまうが、神様は裁いたり怒ったりしないので、希望をもって神様にゆだね、亡くなった人のために祈りましょう。苦しみ、悩みを担い合い、支え合って生きることを大切に」と話した。

共同祈願は、自死率が高いとされるLGBT（性的マイノリティー）の方々のためにもささげられた。ミサ後は講師や大司教を囲んで意見を交換し、終了した。

人

2016年から18年まで週刊『こじか』に連載された漫画『そのとき風がふいた――ド・ロ神父となかまたちの冒険』が単行本化され、ド・ロ神父来日150年記念日の今年6月7日に刊行。齋藤さんは、物語の原案を作成した『こじか』編集部（岡崎才朗編集長）の一人で、取材や編集にあたった。

2015年の秋に初めて訪れた外海では、海からの風、心安らぐ出津教会の聖堂、温かみのある石造りの塀などが心に残ったという。「この地に大地と信仰の実りをもたらしたド・ロ神父に関心を持つようになり、そのマルチな才能、ものづくりに対する真摯な姿勢、機知に富んだ人となりが浮かび上がってきて、いっそう興味が深まりました。世界遺産登録に向けての動きもありましたので、連載で取り上げてみてはどうかと考えるに至り、さらに神父を取り巻く人々――パリ外国宣教会の司祭、髙木仙右衛門や岩永マキなどの信徒の献身的な働き、生きざまにも強く心を打たれました。それで副題を『ド・ロ神父となかまたちの冒険』としたわけです」

構想が固まる一方で漫画家が見つからず、そんなとき教会の友人からイラストレーターのニューロック木綿子さんを紹介してもらった。「彼女のタッチがド・ロ神父の人柄をユーモラスに描くのにぴったりだと思いました。資料をよく調べ、建築物を細部まで丁寧に描き、子どもたちが興味を持てるよう工夫が凝らされていました」。また、漫画の冒頭はプティジャン神父（のちに司教）が中心となり、ド・ロ神父はなかなか登場しない。そこには信徒発見、浦上四番崩れまでを描きたい意図があった。「当時の時代背景を知る上でも重要ですし、信仰を密かに守り続けた潜伏キリシタンの思いが一気に噴出する場面は、舞台でいえば最高の見せ場。ミサに与る喜び、神様への思いがあふれる場面は、私たちの信仰をも奮い立たせる力があると思います」

高校の修学旅行以来の訪問となった大浦天主堂は、全く異なる視点と新鮮な気持ちで見学した。ド・ロ神父記念館や救助院で案内をしてくれた人々との出会いにも感謝する。作中の登場人物にも愛着がある。「キンベーさん」こと中村近蔵や大石シゲ、仙右衛門、鉄川与助。「これらの過程に神様の計らいをみる思いがしました。タイトルには、角力灘（すもうなだ）から吹き付ける海風を、聖霊のシンボルとしての〝風〟と結びつけてそのように入れました。ド・ロ神父となかまたちに知恵と勇気を授け、彼らを通して働かれた聖霊を表現する上でも〝風〟はふさわしく、私自身、この制作に携わった人々、協力者の中に〝風〟を感じていました」

最後に、「『こじか』は今年で60年目を迎えました。信仰という最高の遺産を引き継いでいくための道具の一つとしてご活用ください」と一言。爽やかで、快活さが印象的。東京・徳田教会。42歳。

ド・ロ神父らを描く漫画を編集

オリエンス宗教研究所『こじか』編集部　齋藤みず穂さん

『そのとき風がふいた…』漫画／ニューロック木綿子、監修／中濱敬司。税別1,300円。オリエンス宗教研究所 TEL 03-3322-7601

みことばにふれて153

山口 雅稔 神父

（コンベンツアル聖フランシスコ修道会、本河内教会）

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」（マルコ8・33）。9月16日年間第24主日の福音箇所です。ペトロはイエス様に「あなたは、メシア」と答えたばかりなのに、イエス様からサタンと言われてしまいます。それは、イエス様の思うメシア像とペトロの思うメシア像が異なっているからでした。そればかりかペトロの思いはサタンの思いと同じのようで、イエス様の思いとは真逆ということになります。

人がよいと思っても、時には神様のみ旨を邪魔したり、み旨とは真逆となってしまう危険性があることをこのみことばは教えてくれます。なぜでしょうか。それは、ペトロのように人がイエス様より自分を優先するからです。この聖書箇所の正確な意味は、「サタン、私の後ろに引き下がれ」ですから、ペトロはイエス様に後ろではなくイエス様の前に出てしまっているのです。それが「神のことを思わず、人間のことを思っている」ペトロの姿に代表されるわたしたちの姿でもあります。その後にイエス様は次のように言います。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と。自分をイエス様より優先するのではなく、イエス様の後に従うようわたしたちは招かれています。自分ではよかれと思っていることも自分勝手な理想や愛のない正しさかもしれません。社会で正しいとされていた律法学者やファイサイ派の人たちも、イエス様に反対するのはよいことだと思っていたのです。

「お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ1・38）とおっしゃった聖母マリア様は、常に神様のみ旨を優先させた方です。「みこころが天に行われるとおり地にも行われますように」と主の祈りを唱える時、自分を主より優先させないように、聖母マリア様を意識して祈ってみてはいかがでしょうか。

新刊良書

★もうひとりのはかせ

文＝中井俊巳
絵＝おむらまりこ

原作は「四人目の博士」「アルタバン物語」などの題でも、映画、劇、講話などで紹介されてきたキリスト教文学の世界的な名作である。幼児にもわかる言葉と幻想的な美しい絵本となった。マタイ福音書25章31節以下のメッセージを大人にも深く感じ入る物語として伝える。

文は長崎教区に35年間在住していた作家で、絵はカトリック学校教師による。昨年発行され好評の『ながさきアンジェラスのかね』に続く共作のクリスマス絵本。新教出版社、税別1400円。

★★★

★つくってあそぼうクリスマス

作＝ジョーイ・チョウ
訳＝つばきうたこ

イエスのご降誕物語がペーパークラフトに！歌、オーナメントやアドベントカレンダーの工作も収載。ドン・ボスコ社、税別1000円。

お知らせ

〈一菜募金の支援状況〉

今年度の一災募金からの支援状況（10月4日現在）は次の通り。▼5月…大山小教区信徒へ火事見舞いのため、15万円。▼7月…西日本豪雨災害被災地支援のため、広島教区へ200万円、カリタスジャパンへ200万円。▼10月…北海道胆振東部地震被災地支援のため、札幌教区へ50万円。豪雨災害被災支援のため、深堀教会へ50万円。

短信

〈司祭団ソフトボール〉

9月25日（火）五島市中央公園で司祭団ソフトボール大会が開催され、54人の司祭が選手として応援団として参加した。多くの信徒、シスターたちの熱い声援に、司祭たちもハッスルプレーや珍プレーで応え、今年は特に20本ものホームランが放たれ、活躍を見せた。最優秀選手は山村憲一師（平戸）。優勝は長崎B、2位 長崎A、3位 佐世保・平戸、4位 五島。

ぶどう園

▼教区主催追悼ミサ　11月4日(日)14時、滑石教会。

▼司教座聖堂献堂記念ミサ　11月4日(日)18時30分、浦上教会。

▼黒瀬の辻殉教祭　11月11日(日)13時、平戸市生月町クルスの丘公園。雨天時、山田教会。

▼一日の祈りの集い　11月20日(火)西町、12月1日(土)本河内。9時15分～16時。参加費500円。みつあみの会主催。要申込。

▼講演会「家庭は小さな教会」　11月25日(日)13時30分～15時30分、カトリックセンター。講師・深堀邦枝氏（福岡教区信徒）。教区家庭委員会主催。教区女性部共催。

▼信徒発見記念劇　①11月30日(金)②12月1日(土)熊本県立劇場演劇ホールで、③12月16日(日)福江文化会館で上演される。監督・脚本／古巣 馨（長崎教区司祭）劇団さばと座主催。チケット（千円）は①②熊本、③五島市の各教会で販売。

▼平戸ザビエル祭　12月2日(日)、平戸文化センター。13時～講演、講師・古巣 馨師（長崎教区司祭）。14時～記念ミサ。

感謝

―香典返し―

長崎カトリック神学院

●佐藤 馨様（ケアハウスかおり）

故マリア佐藤ヒサエ様

●大脇京子様（浦上）

故ミカエル大脇秀雄様

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

大浦天主堂オリジナル　メダイとロザリオ

天主堂下「オラショのお店」で販売します

メダイ　25×29㎜
十字架　35×48㎜
各1,320円（税込）～

お土産品と別に、大浦天主堂にちなんだ聖具をお求めになる方がたくさんいます。表を信徒発見の聖母、裏を大浦天主堂をモチーフとしたトップ、センターメダイにもなる少し大きめなメダイと、大浦天主堂尖塔の美しい十字架をモチーフとした十字架、またそれらを使ったロザリオを作りました。

開店時間　午前10時～午後4時（月曜定休）
問合せ先　大浦天主堂　TEL 095-823-2934
長崎市南山手町5番3号

カトリック長崎大司教区 国宝大浦天主堂保存委員会